

---

# ブルージーンズメモリー

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブルージーンズメモリー

### 【Nコード】

N6765N

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

いきなり東京に旅立つあの娘。俺はその娘を追って駅のホームに行って誓ってやった。マッチのあの名曲からヒントを得た作品です。

## 第一章

ブル・ジーンズメ

モリー

話を聞いたのは突然だった。

俺はその話を聞いてた。話してきたツレに問うた。

「それマジか!？」

「あ、ああ」

ツレは俺に掴まれて揺れながら答えた。勿論揺らしているのは俺だ。

「そうだよ。その通りだよ」

「あいつが何でだ？」

「何でも夢があるらしいんだ」

「夢!？」

「東京に出てな」

俺達は湘南にいる。生まれも育ちもここだ。ここでずっと生きていくつもりだった。しかしだった。

あいつはこの湘南を出て東京に出る。それを聞いて俺は我を失った。

それで取り乱してた。ツレを問い詰めた。

「夢って何なんだよ」

「何かな」

「ああ、何か？」

「向こうで店を出したいらしいんだよ」

「そんなのこっちでもできるだろうがよ」

「それでも東京で働きたいらしいんだよ」

ツレはこう話すのだった。

「それでなんだよ」

「何だよ、それ」

俺は思わずこう言ってしまった。

「訳がわからねえよ」

「しかし本当のことだぜ」

「マジか」

「ああ、マジだ」

ツレはまた俺に答えてくれた。

「そつらしいな」

「糞っ、本当に急だな」

「けれどな」

ここであった。ツレは俺に問うてきた。問う方と問われる方が逆になった。

「何でなんだよ」

「何でだつて？」

「御前やけに焦ってるな」

その我をなくした俺への言葉だった。

「それは何でなんだよ」

「あっ、いや」

言われてた。俺はやっと気付いた。今の自分自身にだ。

それで取り繕うとする。しかしだった。

「まさかと思うけれどな」

「いや、何でもない」

「聞かないぜ」

ツレは笑ってこう言ってくれた。

「しかしな」

「ああ」

「後悔はするなよ」

こつも言ってくれた。

「絶対にな」

「後悔は、か」

「後悔つてのは辛いものだからな」

後悔つてやつは生きていれば絶対にあるものだ。しかしそれはだ。中々消えなくて残っていて。何かあれば責めてくるものだ。

俺はその後悔つてやつが嫌いだ。一番嫌いだ。それを言われてだつた。

「それじゃあな」

「決めたか」

「ああ、決めた」

こうツレに返した。

「それであいつは何時東京に経つんだ？」

「明日だ」

「おい、早いな」

「だから急にその行く日が決まったんだよ」

ツレは俺にこのことも話してきた。

「本当にな」

「わかった。それじゃあな」

「どうする？それで」

「行くに決まってるだろ」

答えはだ。もう決まっていた。

「今からな」

「よし、それじゃあな」

「行ってそれであいつと会って来る」

俺はツレにも答えた。

## 第二章

「明日な」

「頑張れよ」

「ああ、後悔だけはしないさ」

こう言っただった。俺はその戦いの場に向かった。行く場所はだ。本能的にわかっていた。あそこだ、あそこしかないかった。

次の日朝早くだ。朝だつてのにもう暑い。俺は青いジーンズを穿いてそれでバイクを飛ばして駅に向かった。高校の時から乗ってるバイクだ。

それに乗って駅に入った。すぐにホームまで駆ける。あいつはそこにいた。

「えっ……」

「どうしてって言いたいのか？」

驚くあいつに言っただった。

「そうなんだな」

「何でなの？」

「おい、それは今言っただぜ」

驚くこいつに言っただった。

「話聞いたんだよ」

「そうだったの」

「何で東京なんだよ」

俺は怒った顔で尋ねた。

「何でここじゃないんだよ」

「御免なさい」

こいつは俺に謝ってきた。

「東京で。働きたいから」

「別に湘南でもいいだろ」

俺はありのままの心をぶつけた。

「この街でもな。そうじゃないのか」

「けれど東京なの」

「何でだよ」

「去年東京に行つてね」

「ああ」

「何もかもがとても奇麗だったから」

こう言つてきた。

「それでなの」

「ここより奇麗なのか」

「ええ」

俺の言葉にだ。こくりと頷いて返してきた。

「私にとってはね」

「どうしてもだつていいのか」

「行くわ」

今にも涙が溢れそうな目で俺に言ってくる。

「これから」

「くそっ、それじゃあな」

俺はその言葉に観念した訳じゃなかった。けれどそれでもだ。こ  
う言わずにはいられなかった。それで言つてやった。この言葉をだ。

### 第三章

「待ってるよ」

「待ってるよって?」

「俺も後から行く」

「こう言ってやった。」

「俺の家は知ってるよな」

「喫茶店よね」

「東京にも店を出す」

幸い俺は次男坊だ。店は兄貴が継ぐことになっている。海沿いの白い洒落た喫茶店だ。客の入りは半端じゃなく多い。特に夏はだ。

「俺もな」

「それじゃあ」

「その時行くからな」

「こう言ってやった。」

「その時をな」

「本当に来てくれるのね」

「その時まで待ってる」

「ここでだ。駅の放送が入った。電車が来るって放送だ。」

「いいな」

「わかったわ。それじゃあ」

「さよならなんて言わないからな」

「言う筈がなかった。今の俺が。」

「絶対に行くからな」

「ええ、じゃあ私もね」

「また会おうぜ」

顔を見据えて言ってやった。

「東京でな」

「ええ」



ベルが鳴った。電車が来た。その東京へ行く電車がだ。こいつを見たつもりだった。肌がよく焼けている。それがとても似合っている。

そして胸のネックレスもだ。長い黒い髪もだ。全部似合い過ぎていた。この街に。

それでも俺はもう言わなかった。最後にこう言っただけだった。

「またな」

「ええ、東京で」

最後に微笑んでくれた。そうしてだった。

電車に乗り東京に向かった。俺はそれを見送ってだ。暫く駅のホームに立っていた。

駅から出てバイクを飛ばしてだ。海に向かった。海はいつも通り何処までも青くて綺麗だった。俺はその海を見て思った。

あいつとずっと見ていたかった。けれどだ。

「東京にも海はあるな」

俺はこのことに気付いた。そしてだった。

「待ってるよ。絶対にそっちに行ってやるからな」

こう決心してだった。それからガムシヤラに働いた。店を手伝って宣伝をしてそのうえであちこちにバイトに出てだ。金もかなり貯めた。

そしてだった。遂に念願適ってだ。暖簾分けみたいな形で東京に店を出した。最初に向かう場所はもう決まっていた。

場所は後であいつからの手紙で聞いていた。そこは綺麗な一軒の花屋だった。

そこにあいつがいた。あの頃と変わっていない。店の前でお客さんに花を手渡していた。スイートピーだ。

そのあいつに。俺から声をかけた。

「よお」

「あっ……」

「来れたぜ、やっと」

にこりと笑ってやった。俺もあいつもあの時の青いジーンズのままだ。東京でも、大人になってもこのことは変わらなかった。あの時のままだった。

ブルージーンズメモリー

完

2010・9・9

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6765n/>

---

ブルージーンズメモリー

2010年10月8日14時03分発行